

特集 凍結肩の最新の知見と治療法

introduction

凍結肩は、発生頻度が高く、「五十肩」として一般的な認知度も高い疾患にもかかわらず、いまだに病態が解明されていない疾患の1つです。特に治療しなくても自然に完治する疾患と認識されているため、放置している患者さんが多く、整形外科医の治療に対する積極性も欠ける傾向にあります。実際には自然に完治する症例は40%程度にとどまること、症状固定までに1～2年という長い罹病期間を有することがわかっています。

この病態に対する最新の知見と最新の治療戦略を整理すべく、今回の特集を組ませていただきました。

凍結肩を議論するうえで、その定義を明確にしておく必要があります。凍結肩は肩関節拘縮を生じる代表的疾患の1つですが、その定義については混乱がみられるため、肩関節拘縮のなかでの現在の凍結肩の位置付けを玉井和哉先生に解説いただきました。

凍結肩の病態の正体に少しでも迫るべく、吉田 衛先生には滑膜の遺伝子・蛋白質発現の異常、奥野祐次先生には血管造影所見、笹沼秀幸先生にはdynamic MRI所見という切り口で解説をお願いしました。

治療法に関して、その基本である保存療法として、ステロイド内服治療について高瀬勝己先生に、joint distensionについて石垣範雄先生に、理学療法について飯田博己先生にその実際を紹介いただきました。立原久義先生には、新しい視点で凍結肩を3つのタイプに分類し、そのタイプの特徴と治療的アプローチの違いをお示しいただきました。後藤英之先生には、最近飛躍的に画質が向上した超音波を用いたさまざまなブロック療法の詳細を解説いただきました。超音波により整形外科診療スタイルに大変革をもたらした皆川洋至先生には、サイレント・マニピュレーションのノウハウをご教示いただきました。保存療法に抵抗する難治例に対する鏡視下関節授動術について、下方関節包を切離しない術式を神戸克明先生、後下方ポータルを使用して下方関節包を切離する術式を柴田陽三先生に解説いただきました。

第一線の先生方に執筆をお願いした本特集が、読者にとって凍結肩診療の一助になることを期待しています。

愛知医科大学医学部整形外科学

岩堀裕介